

## まえがき

大丈夫という言葉は、ダイジョウブと読み、強くてあぶなげないとか、確かで間違いない、といった意味で使われますが、これをダイジョウブと読むとまったく違った意味になります。大は美称で、丈夫はますらおとか、立派な男子といった意味であり、『十八史略』はこういう人物を「男子中の真男子」と呼んで大いに称えました。いわば大丈夫とは、古代中国における男子の理想像ともいえる存在で、『三国志』で名高い諸葛孔明は「大丈夫と謂うべし」（『小学』）と評されました。

そこで大丈夫の人間像を簡潔にいうと、志操堅固、質実剛健、大度宏量といった男の美学を集中的に具現した真男子の見本のような人物を考えればよいでしょう。『孟子』はそれをさらに追求して、次のように説明しています。

天下の広居に居り、（仁という天下の広い住居におり）

天下の正位に立ち、（礼という天下の正しい位置に立ち）

天下の大道を行く。（義という天下の大道を行く）

志を得れば民と之に由り（志を得て世に用いられたなら人民とともに行動し）

志を得ざれば独りその道を行なう。（志を得ずに野にいれば自分一人でその道を行なう）

富貴も淫する能わず、（いかなる富貴もその精神を墮落させることはできず）

貧賤も移す能わず、(いかなる困窮もその志を変えることはできず)

威武も屈する能わず。(いかなる威光・武力をもってしても、その魂を屈服させることはできない)

此れを之れ大丈夫と謂ふ。(こういう人物こそ大丈夫というのである)

以上が『孟子』に記された大丈夫の人間像ですが、これが日本の武士に与えた影響には量り知れないものがあり、中国の士人が諸葛孔明等の大丈夫をイメージして、自らを男子中の真男子とすべく刻苦勉強したように、日本の武士も楠正成等の大丈夫をイメージして、武士中の真武士になるべく自らを叱咤激励したのです。いわば大丈夫の美学というものは、中国の士人のみならず、日本の武士の烈々たる士魂を涵養するうえで、極めて大きな影響を与え、日本武士道の形成にも大いに寄与したといえるのです。

また『論語』『孟子』といった経書や『史記』『三国志』といった史書は、日本武士の美意識を涵養する上で大きな働きを示しました。武士道とは思想というよりも明らかに倫理であり、さらにつき詰めていうなら倫理というよりも濃厚に美学であるということができるのですが、この武士道美学は明らかに大丈夫の美学の延長線上にあり、日本武士の琴線に烈しく共鳴した書の筆頭に、諸葛孔明の『出師表』や司馬遷の『史記』の内「刺客列伝」等が挙げられるのも、それを明白に証明しています。

また南宋の忠臣、岳飛や文天祥の清冽にして凛烈な生きざまが、日本の幕末の志士に強烈な影響を与えたことは揺るぎない事実であり、たとえば安政の大獄で斬に処された橋本左内は、号を景岳と称しましたが、これは岳飛を景仰しての命名で、その獄中詩には「天祥の大節嘗て心折す、土室猶お吟ず正氣の歌」とあります。文天祥の大節にかつて感動し、今なお土牢の中で天祥の正氣の歌を吟唱しているという意味ですが、当時は左内に限らず、多くの志士が中国の大丈夫の残した詩や文に強い感化を受けていたのです。

そこで本書では、中国の古典の中から、日本武士に強い影響を与えた文章をピックアップして、テーマごとにまとめてみました。どのテーマから読まれてもいいのですが、本書に採録した文章は音読をお勧めします。幕末の志士がそうしたように、音読することによって原文にこめられた熱誠や激情、あるいは透徹した憂国の至情といったものが鮮烈に蘇るに違いありません。幕末の志士はそれらの言葉を音読することによって大丈夫の美学を我がものとし、さらにそこに自らの生きざまを重ね合わせて、それぞれの志士独自の武士道美学を涵養していったのです。その意味で本書を音読すれば、大丈夫の美学のみならず、その大丈夫の美学に共鳴した幕末志士の武士道美学をも感得でき、それが混濁の世を生きねばならぬ読者各位の精神を、なお一層強靱なものとする一助になるであろうことを祈ってやみません。

北影雄幸